

長忌寸意吉麻呂の「におい」——『万葉集』卷16・三八二八考——

太田雅也

一、はじめに

『万葉集』卷十六は「有由縁并雑歌」と題された歌巻で、集中にあってその題材、用語の特異性は広く知られているところである。その中に長忌寸意吉麻呂の詠物歌八首がある。この八首中の用語については、夙に石井庄司氏が「動物・植物をはじめ、人倫・器物から仏教・道釈と、万葉集の全般からいっても、特異の領域に出ている」と指摘している^①。これら意吉麻呂の一連の歌は表面上の意味としてはほぼ固定化されているものの、従来の通説では見逃されている側面があるのではないか。本稿では次の意吉麻呂の一首を取り上げ、考察を加えたい。

香、塔、厠、屎、鮒、奴を詠める歌

香塗流 塔尔莫依 川隅乃 屎鮒喫有 痛女奴

(香塗れる 塔にな寄りそ 川隅の 屎鮒喫める 痛き女奴) (16・三八二八)

本稿中の万葉集歌の引用は、中西進『万葉集 全訳 注原文付』(講談社文庫)を用いた。

二、【香・塔・厠・屎・鮒・奴】についての語釈・解釈

【香・塔】「香」の訓みについて『校本萬葉集』によれば諸本はいずれも「カウ」で、細井本、神宮本は左に「カヲ」ともある^②。歌句中の「香」の用例は三三三例で、「カ」という訓み以外の用例は「にほへる」(3・四四三)、「かぐ」(10・一九六七)、「にほえ」(13・三三〇五)、「かぐはし」(19・四一六九)がある^③。当歌の「香」の訓みについて諸注で初めて言及したのは、『代匠記』(初稿本)で、「香の字日本紀にこりとよみたれば、和訓にもよむへきか」とあり^④、以後も解釈

に相違は見られるが、「コリ」とする注が多かった。『代匠記』が挙げた『日本書紀』の記述は、皇極元年七月の「焼^レ香發^レ願^レ（香を焼きて願を發す）」で、『旧大系』頭注に「香をコリと訓むのは、すでに東洋文庫本の仮名にもある。その語源は、香が凝（こ）り、かたまつたものであるということによるのであろう」とある。また、『延喜式』齋宮式の忌詞にも「堂稱^二香燃^一（堂を香燃と称い）」（一条本訓）とある。だが、『旧全集』が「カウ」を採ると、以降の主な諸注は『全訳注』を除き、「カウ」と訓む。「香」は『大漢和辭典』では「虚良切」で「キヤウ、カウ」と訓み、『類聚名義抄』では「音卿、カウハシ」「カウバシ、和カウ」とある。写本はいずれも「カウ」であり、その他史料の多さでも「カウ」が優勢というところから無難に現在の、字音「カウ」が主流になっているようである。

「コリ」「カウ」のいずれも決定的な根拠に欠けることは否めない。しかし、本歌を含む吉麻呂の詠物歌八首を見ると、歌句中の仮名書例ではない名詞単語四十二語のうち、字音語は「塔」と「力士（舞）」のわずか二語である。また、『時代別国語大辞典・上代編』「コリ（香）」の【考】には、

第一例（筆者注・本歌）、カウと訓んで字音語とみる説もある。コリを「香」の字音から転じたとする説があるが、「ng」の韻尾をう行に転じて用いた例を知らない。カワリの約とする説は認めがたいが、字音語ではなく和

語であろう。

とあり、角川の『古語大辭典』「コリ（香）」でも、
……「香」の字の字音に基づくとする説があるが成立しがたい。「香塗れる塔」に依りそ（万葉・三二八二八）の例は「かう」と読む説もあるが疑わしい。

つまり、八首中の詠物は多く和訓で訓まれており、和歌集ではない『書紀』や『延喜式』の用例からしても、また、『時代別』や『古語大辭典』の字音語ではないという指摘も合わせ、「香」は和訓「コリ」で訓む方がより適当と思われる。

次に、「塔」は卒塔婆、塔婆の略で梵語 stupa の音訳字。「香塗れる塔」はその「塔」に「香」を塗るということであるが、『古義』は前述の皇極紀や齋宮式の「コリタキ」（焼香、香燃）を挙げたうえで、

さて諸の佛籍に、塗香といふ事の多くある、其は佛身に香を塗ルことなり、今は塔なれば、焼とこそいふべけれ、塗と云る事、似つかはしからず、されば此は、もと香焚流などありけむを、塗香といふことあるに混て書誤れるならむ、さらばコリタケルと訓べし（傍点原文ママ）

と「塔」には香を塗るのではなく、香を焚くべきであると指摘した。

しかし、塔に香を塗ることは古くから中国で行われており、

『賢愚経』の「むかし過去、迦葉 (Kāśyapa—1120) 佛の時、一の老婆あり、三宝を信敬す、(その家大いに富めり) 衆香を合集し、油を以つて之に和し、往いて塔に塗らんと欲す」や『大乘集菩薩学論』の「斯由塗香於佛塔」(斯れ仏塔に塗香するに由る¹⁷) からうかがえる。また、正倉院には「沈香末塗経筒」という、経筒に香末を塗った物があり、「香を塗る」のは佛身に限ったことではない。

塔も香も仏教と関連が深く、神聖な「塔」に更に「香」が塗ってあるとはそれほど貴重ということであろう。が、同時に、ここで重要なのは「香〓高貴な匂い」に着目すべきことであると考える。

【廁】 詠題詞の「廁」は本文歌中「川隈」だが、『校本』では諸本いずれも「川隅」となっている。『廣雅』釋丘篇に「慶坻隅隈也¹⁹」とあり、『攷証』にも「隅は角なれば、おのづからに、隈の意こもれり²⁰」とあるように、「隅」は「隈」と通用と考えてよい。「川隈(カハクマ)」は『書紀』仁徳三十年九月に

つぎねふ 山背河を 河浜り 我が浜れば 箇波区莽珥^{か はく まに}
立ち栄ゆる……

という歌謡にも見られる。「カハスミ」は集中に例はない。「川隈」は川の曲がったところを言い、この言葉自体には「廁」の意味はない。これについて、東光治氏は、

水流の上に便所を設けることは農業を解せざる時代の先

住民の便所の構造であつて、農業上主要肥料とした糞尿を萬葉人が水に流して捨てた筈はない。こゝはたゞ川と廁との語路を合せただけの事と思はれる²¹。

と述べて、当時は農耕の発達と合わせて、糞尿は貯めて肥料に利用するようになっていたとする。しかし、藤原京・平城京発掘調査の観点からの黒崎直氏の

藤原宮の中からは、幅五メートルもある大溝の上に跨ぐように建てた、文字どおりの川屋〓廁^{かわや}も見つかっています。(中略) 数万の人たちが、連日連夜、くみ取り式や街路の側溝の水を利用した水洗式のトイレを利用していただけです。街路に沿って網の目のようにめぐらされた側溝を通して、排泄物が河川へ流れていきます。いまと違って自然の浄化能力に頼るしかありません²²。

という指摘のように、この時代、「川隈」はただちに「廁」を想起させ、「川隈の屎」となれば十分に「廁」を折り込んでいると考えられる。即ち、「川隈」は「廁」であり、「隈」(曲がったところ)は、水の流れが激んで、屎やゴミなどが溜まっていた汚い、臭いというイメージにつながるのである。

【屎・鮒】 「屎鮒」は、集中孤例である。「屎」は『古事記』『書紀』にはいくつも見られるが、集中は他二例のみである。その一首目は、

忌部首の、数種の物を詠める歌一首 名は忘失せり
枳の 棘原刈り除け 倉立てむ 屎遠くまれ 櫛造る刀

自(16・三八三二)

という歌で、これは本歌を含む意吉麻呂の詠物歌八首のすぐ後に続く詠物歌である。ここでも「屎」は、汚らわしいもの、臭いもの、避けるべきものとしている。

「屎」の二首目は、

高宮王の数種の物を詠める歌二首

芭莢に 延ひおほとれる 屎葛 絶ゆることなく 宮仕

せむ(16・三八五五)

という歌で、「屎葛」とは、『倭名類聚抄』卷十の「細子草」に「久曾可都良⁽²³⁾」と訓のある植物である。ここでは、「屎」と「葛」は分かれずに、「屎葛」で一語(固有名詞)である。『時代別』「屎葛」に「蔓の長く延びるところから、タウルコトナクの序詞の中に用いられている」とあるが、この歌では単なる序詞ではなく、宮仕えへの不満などが「クソ」という言葉の中に隠されているとも見える。

次に「鮒」であるが、『令集解』(賦役令)に「近江鮒五斗⁽²⁴⁾」と献上されたことが見え、身近に捕れる食料だったのでろう。「鮒」の字は『古事記』『書紀』には見られないが、『書紀』には個人名の「品遅部雄鮒⁽²⁵⁾」や「玉作部鮒魚女」の「鮒」も「フナ」と訓まれている。「鮒」は集中にもう一首ある。

高安王の裹める鮒を娘子に贈れる歌一首 高安王は後

に姓大原真人氏を賜へり

沖方行き 辺を行き今や 妹がため わが漁れる 藻臥

し束鮒(4・六二五)

「藻臥し」とは「藻の中に潜っている」という意で、「束鮒」は、一束(一〇センチほど)の小さな鮒とされている。

また、「鮒」と言えば「鮒ずし」を思いつく。「すし」は奈良時代以前に既に伝わっており、万葉人も食していたであろう。日比野光敏氏は、今日の「鮒ずし」は古代の製法とは異なるが古風な特徴も残っており、「すしのルーツが魚肉の保存をめざしたものであるならば、その原初的用途を残しているのは、わが国ではフナずしだけだということになる⁽²⁶⁾」と、「すし」の原初性が「鮒ずし」にはあると述べている。当時の「鮒ずし」が保存用の発酵食品(なれ鮓)であるならば、そこにはかなりの臭いがあった。「鮒」には、このような臭いの連想もあったのである。

集中の「屎」と「鮒」を見てきたが、本歌は「屎鮒」である。これは『代匠記』(初稿本)に「くそふなは葛にくそかつらあることく、ふなの中にさる名おひたるが有なるへし」とあり、東氏も「クソブナ」という、鮒とは別種の魚(マフナ、ボンブナ、タナゴ)で、その味は悪く食用とはされなかった物であるとしている⁽²⁶⁾。『時代別』にも「現在、和歌山県橋本市付近では、やりたなごをクソブナという。鮒に似てやや味の劣るところからいったものか」とあるが、「クソブナ」がいくら不味いとは言え、それを食べたという程度では避けるべき「屎」の強烈さが無い。『窪田評釋』が「厠の屎を食

つてゐる⁽²⁷⁾」として以来「川隈に溜まった尿を食った鮎」とするのが通説である。

やはり、ここでの「屎」とは「屎葛」のような単なる鮎の固有名詞（クソブナ）ではなく、直接に「くそ」であると考へた方が表現効果が大きく、意吉麻呂らしく思われる。また、臭い鮎への「クソッ」という罵りの意も込められているのであろう。

以上から、「屎鮎」については、「(川の汚い澱みに住んで)そこに溜まった尿を食って悪臭を放つ鮎」で、「鮎」は臭いと密接に結びついたものでもあった。

【奴】「女奴」は集中この一例のみであり、「奴」を「女奴」にすることで、不浄性がより強まっている。「いたし」が何を形容するのかについては、『代匠記』（精選本）の「イタキハ甚ニテ、賤シキ者ノ限ナル意ナリ」のように、その身分の低さ、賤しさに主眼を置くものと、『旧大系』の「不浄を強調して、ひどくきたないの意」⁽²⁸⁾などの、汚らしさを重視するものの二通りが中心である。

だが、「女奴」は婢、女の奴隷であり、身分が賤しいことは改めて言うまでもない。また、汚いものを食べたから汚いというより、臭いものを食べたから臭いという方が実際に忌避すべきものとしてリアルである。賤しくて汚く臭い者が「尿を食った臭い鮎」を食べるのだから、近寄れないほど「ひどく臭く」なるのであり、それでこそ「塔にな寄りそ」

が生きてくる。従って、「いたし」はその「臭さ」を表している⁽²⁹⁾と考える。

以上述べてきた「香・塔・厠・屎・鮎・奴」の語釈・解釈を通してみると、「香塗れる塔」は、「香」が塗られた尊い「塔」が高貴な匂いを漂わせている。そして、「川隈」は「厠」であり、尿などの汚物が溜まって臭いところである。その「屎」を食べて育ったのが、悪臭を放つ「鮎」であり、その「屎鮎」を食べてひどく臭いのが「女奴」であるということになる。

三、匂いと臭い

意吉麻呂には、

引馬野に にはふ榛原 入り乱れ 衣にははせ 旅のし
るしに (1・五七)

という歌があり、「にはふ」「にははせ」は「色(染)」の意とされている。しかし、第五句は原文では「多鼻能知師介」とあり、『新大系』に「音仮名「鼻」は万葉集にこの例のみ。「にはふ」の語に嗅覚が加わって、「鼻」の字が用いられたのだろうか」とあるように、この歌の「にはふ」「にははせ」という語は単なる「色(染)」ではなく、「匂い」が関わっている。また、集中の「にはふ」「かぐ」「かをれる」「か(香)」などの「匂い」に関係ある語を調べてみると八十首(本歌除く)に八十九例見られた⁽³⁰⁾。その中でこの歌のように「匂い」

語が複数ある歌はわずか八首⁽³¹⁾で、短歌では四首のみである。つまり、この歌からも意吉麻呂の「におい」への強い関心がうかがえる。

加えて、本歌の次の歌、三八二九は

醬酢^{ひしほす}に 蒜搗^{ひる}き合てて 鯛願ふ われにな見えそ 水葱
の羹

というものである。この「醬酢」は「現在でいったら一杯酢、または酢味噌にあたる」(『日本古代食辞典⁽³²⁾』)物で、酸味が効いて、においもそれなりの調味料である。「蒜」も同書に「臭気の強いニンニクとかノビル、ニラなどの総称」とある通り、においの野菜である。ここにも「におい」が詠われている。

『万葉集』における嗅覚的な認識の乏しさは、早く『玉勝間』で梅の花を例に述べられている⁽³³⁾。しかし、本歌について『集成』に「気高い匂いと不浄な臭いを取り合わせた点が眼目」という指摘もあり、また、前述してきた如く、意吉麻呂は「におい」のある物、「におい」自体に敏感であった。同時に、「臭さ」には苦笑を誘うようなユーモアがあり、「戯笑歌」に通じている。高橋庸一郎氏は、『懐風藻』では漢籍の学習によって「匂い」という観念を理解できるようになったと述べているが、意吉麻呂にも『遊仙窟』などの漢籍の素養が指摘されており、そのことも「におい」を詠んでいることに関連しているであろう。

また、「芳香が邪気をはらうとして仏教で尊ばれた」という指摘⁽³⁶⁾や、前述の『食辞典』に「蒜」の呪性が述べられているように、「におい」には呪力があった。本歌でも、「塔の香」という崇高な匂いと、「厠の屎鮒を食べた女奴」という賤しい臭いの両方の「におい」の呪力の対立とも言える。乗岡憲正氏は物名歌の「物名」には言語精霊^{ことたま}がこもり、呪力が信じられていたと指摘している⁽³⁷⁾。

意吉麻呂は本歌において「におい」ということを十分に意識しているとして、ここでは以下のように訳す。

お香を塗って良い匂いのしている塔に近寄るなよ。臭い川隈の屎で育った悪臭のする鮒を食って、ひどく臭う女奴め。

四、おわりに

本歌については『窪田評釋』の「以上六首の尊い物と醜い物とを一首の歌の中に詠み込むといふ、難題中の難題である」や、『釋注』の「清浄高貴な塔と不浄卑賤な女奴とを取り合わせたのが眼目」のように、従来の通説では、「香・塔」という高貴なものと、「厠・屎・鮒・女奴」という卑賤なものとの対比を詠んだ歌とされている。

しかし、本稿では「におい」に注目し、語釈・解釈を追いながら意吉麻呂の他の歌とも合わせて考察してきた。そこから、意吉麻呂は「におい」というものに敏感だったと考え、

通説である表面上の「高貴なものと卑賤なものの対比」のみならず、「匂いと臭いの対比(対立)」が本歌の重要な要素であるとするに至った。

注

- (1) 石井庄司「長奥麿」『国文学』一九六八・十一、学燈社
- (2) 古典資料類從『神宮文庫本萬葉集』一九七七、勉誠社
- (3) 『校本萬葉集』(含増補、新増補、追補)一九七九、岩波書店
- (4) 日吉盛幸『万葉集歌句漢字総索引』(下)一九九二、桜楓社
- (5) 『契沖全集』所収『萬葉集代匠記』一九七五、岩波書店
- (6) 「香」の訓に言及しているものは、「略解」(日本古典全集『萬葉集略解』一九二六、日本古典全集刊行会)、「古義」(鹿持雅澄『萬葉集古義』一九二〇、国書刊行会)が少し。「全釋」(鴻巣盛広『萬葉集全釋』一九三四、大倉廣文堂)が詳しく論を述べるも、「釋注」(澤瀉久孝『萬葉集注釋』一九八一、中央公論社)はその論は否定。
- (7) 日本古典文学大系『日本書紀』一九八七、岩波書店
- (8) 『延喜式』(上)、虎尾俊哉編、二〇〇〇、集英社
- (9) 日本古典文学全集『萬葉集』一九七五、小島憲之他、小学館
- (10) 『大漢和辭典』一九七六、大修館書店
- (11) 『類聚名義抄』一九七八、風間書房
- (12) 「香」は除く。四十二語は以下の通り。「三八二四：湯・子等・櫛津・檜橋・狐、三八二五：食薦・蔓菁・樑・行騰・公、三八二六：蓮葉・物・意古麿・家・葉、三八二七：一・二・目・五・六・三・四・雙六、三八二八：塔・川隅・屎・鮒・女奴、三八二九：醬酢・蒜・鯛・吾・水葱・蕪物、三八三〇：玉掃・鎌磨・

- 室乃樹・棗本、三八三一：池神・力士儼・白鷺・梓
- (13) 『時代別国語大辭典・上代編』澤瀉久孝編、一九六七、三省堂

- (14) 『古語大辭典』中村幸彦他、一九八四、角川書店
- (15) 注(6)の「古義」に同じ
- (16) 『藏漢対訳 賢愚経』(高橋盛孝、一九七〇、関西学院大学東西学術研究所)訳文から。
- (17) 原文は『大正新脩大蔵経 第三十二卷・論集部全』(一九六一、大正新脩大蔵経刊行会)。書き下しは新日本古典文学大系『萬葉集』(佐竹昭広他、二〇〇三、岩波書店)による。
- (18) この二つの仏籍は注(17)の『新大系』が指摘している。
- (19) 『廣雅疎證』楊家駱主編、一九七二、鼎文書局
- (20) 岸本由豆流『萬葉集攷證』(萬葉集叢書)一九七二、臨川書店
- (21) 東光治「鮒考」『続萬葉動物考』一九四三、人文書院
- (22) 黒崎直「藤原京11トイレはどうしていたか」(『古都発掘』田中琢編、一九九六、岩波新書)
- (23) 『倭名類聚抄(本文篇)』一九九三、臨川書店
- (24) 日本思想大系3『律令』井上光貞他、一九七六、岩波書店
- (25) 日比野光敏「すしの歴史を訪ねる」一九九九、岩波新書
- (26) 注(21)に同じ
- (27) 窪田空穂『萬葉集評釋』一九五二、東京堂
- (28) 日本古典文学大系『萬葉集』高木市之助他、一九六二、岩波書店
- (29) 「いたし」を「臭さ」と見るのは、「集成」(新潮日本古典集成『萬葉集』青木生子他、一九八二、新潮社)や「釋注」(伊藤博『萬葉集釋注』一九九八、集英社)にある。特に「集成」

はにおいて主眼を置く。

(30) 『萬葉集索引』(古典図書刊行会、二〇〇三、塙書房)などを基に調べた。

(31) 長歌は、16・三七九一、18・四一一一、19・四一六九、四二一一。短歌は他に、16・三八〇一(三例)、17・三九一六、20・四五〇〇。

(32) 『日本古代食辞典』永山久夫、一九九八、東洋書林

(33) 「玉勝間」卷十三「梅の花の歌に香をよむ事」(『本居宣長全集 第一卷』一九六八、筑摩書房)

(34) 高橋庸一郎『匂いの文化史的研究』二〇〇〇、和泉書院

(35) 小島憲之「遊仙窟の投げた影」(『上代日本文学与中国文学』(中)、一九六四、塙書房)や伊藤博「長意吉麻呂の物名歌」(『萬葉集歌人と作品』(上)、一九七五、塙書房)など。

(36) 注(7)に同じ

(37) 乗岡憲正「呪禱の文学」(初出『國學院雑誌』一九五九・五)『古代伝承文学の研究』一九六七、桜楓社

付記 本稿を成すにあたって、懇切丁寧なご指導を賜った日吉盛幸先生及び、日頃より学び示唆を与えてくださる諸先輩方、学友の方々に改めて感謝申し上げます。